



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの遊び・大人のあそび心
Author(s)	加用, 文男
Description	B: シンポジウムⅠ テーマ: 遊び心の謎に迫る 「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書: 子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画). 平成23年11月2日(水)~4日(金). 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 教育学研究院会議室. 札幌市
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書, 18-28
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49384
Type	conference paper
File Information	Kayo.pdf



「子どもの遊び・大人のあそび心」

発表者：加用 文男
(京都教育大学)

どうも、おはようございます。お呼びいただきましてありがとうございます。はるばる京都からやってまいりました。私は今年で還暦になりまして、もうじいさんの年になりかけていますので、講演のようなことはこれでやめようと思っているんですけど…

今日は「遊び心の謎に迫る」というすごいタイトルで、恐ろしくて、とても私はそんな質問に答えられませんので、その周辺をうろうろするような話をしたいと思うんですけど。最初に余談ですけど、京都で私は仕事で年中通わなくちゃいけない保育園ができてしまって、その園でこの前運動会があったんです。運動会で子どもの種目が終わりがけたところに、保護者の出し物になりました。保護者の出し物の中で、乳児組の保護者たちと幼児組の保護者たちの綱引き対抗戦というのがありまして…乳児組というのは0歳、1歳、2歳、幼児は3、4、5歳です。人数はそんなに変わらないです。

僕は園長の近くに座っていて、園長が「さあ、どっちが勝つかなあ？」とかと僕に聞くから「それは乳児組の方が勝つやろう。だって親が若いもん」とか言っていたんだけど、目の前にだだと親たちが並んでみたら、圧倒的に幼児組の親の方が体形的に強そうな人たちが多くて、「ああ、これなら幼児が勝つよ」とか言っていた。それで、1回戦をやったらやっぱり圧倒的に幼児組が勝ってしまったんです。2回戦、場所を入れ替えて（チェンジコートして）始まろうというときに、園長が「なあ、なあ」と僕に誘うように言う。何を言っているかすぐ分かったので、いざ「用意ドン！」で綱引きが始まった瞬間に、僕がささっとこっそり走って行って（負けそう

な）乳児組の親の後ろに勝手に入って行って、プラス1人人数が増えた感じでお助けしてやったら、案の定勝ってしまいまして。『おおきなかぶ』で最後に現れたネズミみたいなことになってしまったんですが。で元の観客席に戻ってきた時、ひょっとして保護者の中で怒る人がいるかもしれないなあなんて思っていたんだけど、戻ってきたら、出場していなかったお母さんみたいな人がやって来て、で、「先生、ああいうことしていいんですかあ」と言われてね。これ、すごく面白かったんですけど。別にとがめているわけじゃなくて笑ってる。遊び心って、こういう話みたいに、やらんでもいいことをわざわざやって、面白くするみたいなことなのかもしれないと思うわけです。これはどういうことかなと、この話を枕において話を続けます。大人の遊びと子どもの遊びの違いみたいなことを考えなくちゃいけなくなったのかもしれない、という話を少ししようかと思っているんです。これを考え始めたきっかけは、もう十数年前のことですけど、きっかけはこういうことでした。

大人の遊びと子どもの遊び

私の息子が4年生だったときに、学校の運動会を見に行っていたら、ちょうど6年生の子たちのリレーがありまして。運動会でリレーというのは花形種目じゃないですか。一番盛り上がる。これを見ていて、アンカーじゃなかったんだけど、6年生のある男の子がそのリレーの最中に、もうすごい大群衆が見ているところで転んでしまったわけです。6

年生の子の走るスピードというのは、我々大人がとてもかなわないくらい速くて、しかも全力で走っている最中に転んだものだから、ごろごろと3回転ぐらいして、バトンもころころと転がって行ってしまっ

僕はそのを見て、これは面白いことになったぞと思ったんです。何でそれを面白いと思ったかということなんです。仕事柄、保育園や幼稚園の運動会は今までくさるほど見てきました。で運動会の当日、リレーの最中に子どもが転ぶと、幼児の場合は担任の先生や保護者の方は「えっ」と思うかもしれませんが、僕みたいな研究者みたいな人は、不謹慎にも「おっ、これは面白い事件が起きたわ」と思うわけです。4歳児、いわゆる年中クラスの子でもでしたら、転んだらだいたいその場で泣き出します。これが5歳児になって年長さんだと、月齢にもよるけど、普通程度の月齢の子だったら、転んでもだいたいその場では泣きませんね。必死で立ち上がって、転がったバトンを拾いに行き、やっと取って走って行って、次の子にバトンを渡して、それで自分のチームの子が待っているところへ戻ってきて、後ろに座ってから、「う、うっ」と忍び泣きをし始めるってのが、だいたい普通の年長さんの振る舞い方です。そういうのを見ると、「おっ、立派に育っているな」という感じがするわけです。そういう姿を今までくさるほど見てきたので、じゃあ6年生の子がそういう目に遭ったらどうなるんだろうなと思って、すごく興味がありました。そうしたら、その子はばーんと転んでから、ばっと立ち上がって、それでさっと周りを見渡してからバトンを取りに行き、それでそれをもって走る。もうずっと遅れちゃってる。半周以上差がついちゃってる。でも走って、次の子にバトンを渡して、そいで自分たちのチームの子のところに戻ってきて、(どうするかと思っていたら)「わはは、やっちまったぜい」とか言っていました(笑)。

僕はそれを見て、実は同じような事件をそれから2〜3年後にもう1回見るようになって、そのときは、私はその近くにいなかったのですが、その子がしゃべっている声は聞こえなかったけど、だいたい離れたところで見えていたら、だいたい似たような反応をしていたんです。それで、「ああ、なるほどね、リレー

はすでにこの子たちにとってはレジャーになっているんだな」と思ったわけです。じゃあ、この子達にとってはすべてがレジャーか、というところではないでしょう。サッカーチームなどに所属していて、肝心の公式戦で失敗したとなれば、これは「ぎゃはは」とはいかないでしょう。そのときから、遊びといっても、それに取り組む態度ということから見ると、いろいろな種類に分けられるものだと思います。それ以来、学童保育所や何かで、小学生の子たちがいろいろ遊ぶところを見たりしているうちに、だんだん、子どもの遊びが、小学校の低、中、高学年へとようになっていくにつれて変わって行って、1つは非常に入れ込んでやる遊びと、レジャーのような遊びと、その真ん中みたいな遊びに分かれていくんだなと思い始めてきたわけです。大人になると遊びはこの3つに分かれてくると思います。

最初に紹介した、僕が保護者の綱引きに勝手に参加した話は、まあどちらかといえばレジャーですよ。ちょっとした味付けをして面白くする。大人が遊び心という言葉を使う場合はたいていこちらの意味でしょうね。軽い意味の方です。

大人では入れ込んだ遊びをする人としらない人がいるから、いちいち一概にみんなとはいえないですけど、入れ込んだような遊び方をする人というのは、半端じゃないことをする人ですよ。釣りなんかに入れ込んでいる人なんかは、もう仕事なんか投げ打ってやるような人がいたり、あるいは登山なんかに出掛けるような人はね半端じゃないですよ。遊びは楽しいとか面白いとかとよくいわれるけれども、ああいうふうに入れ込んでやっている人の感覚というのは、楽しいなんてものじゃないんじゃないかと思う。僕には3,000メートル級の山に、20キロも30キロもある荷物をしょって登っていく人の感覚は分からない。やったことがないから分からないけれども、考えてみたらあれは相当な労苦というか、そんなことして「楽しいですか?」と言われたら、きっと困ってしまうようなことなんじゃないかと思うんです。

入れ込んで遊ぶというのは、楽しいとか面白いとかという範囲を超えたものを含んでくる面があるんだと思うんです。こういうのと、そのとき面白ければいいやというレジャーみたいな遊びは、だいたい違

うわけです。おそらくそのどっちでもない、真ん中のような遊び方があって、いわゆる乳幼児期や小学校の低学年ぐらいまでの子どもたちの遊びは、おそらく中間的なものなんだろうと思うんですけど、もちろんこれは大人にも残っていると思いますが、大人の世界でこういうふうに遊びが分かれていますと、このことが子どもの遊びを見るときに何らかの影響を与えていくだろうと、僕は思うんです。理屈っぽく分けてみますと、遊びというのは、面白さの追求みたいな面といわゆる美的感覚の追求みたいな面の両面を含んでいて、前者のウエイトが高くなるとレジャーっぽくなって、反対の方のウエイトが強くなってくると入れ込み系の活動になっていくと考えられるのではないのでしょうか。だから、もう寝ても覚めてもやめられないみたいな、そういう美的感覚の追求みたいなもののウエイトが大きくなっていくと、いわゆる入れ込んだ活動になっていって、こういうのを遊びとか遊び心などと呼んだら、本人に叱られそうなものになっていくのかもしれない。こういう考え方の枠組がいるのではないのでしょうか。

そういうことが子どもの遊びを見るときに何らかの影響を与えていくことになるのではないのでしょうか。大人の遊び観が子どもの遊びにどんな影響を与えるかというのを昔は考える必要もなかったんでしょうけれども、今の時代になり、始まったのはおそらく1970年代ぐらいからでしょうけれども、やはり子どもの遊びに大人が関わっていくことが求められるし、またそれ自身が不自然でない、そういう時代になってきたときに、この問題を考えなければならぬ時代になってきたかなと思っています。このことについて、これから、私なりにいろいろな形で考えさせられたことをご報告したいなと思います。

大人の遊び観の浸透、その一

大きくは3つぐらいあるかなと思うんですが。私は実は今、自分で一番趣味的に入れ込んでいるのはビリヤードでして、もう暇があれば行っているという感じで。講演をやる最大の動機が、そこで得た金を「ビリヤードに注ぐためだ」みたいに思っているぐらいにやっているんですけど。

ある時、ある大学の先生に「加用さん、それであなたいはいったい何を狙っているの?」と聞かれたことがあって、絶句しました。だって、「何を狙っているって、どういうことですか?」と言ったら、彼は「うーん、どこかの大会に出るとか、何かA級認定とかB級認定とか、そういうのがあるんじゃないですか」とかと言われて、いや、そういうことは僕は考えたこともありませんでした。行きつけのビリヤード場で、僕が「どこかの大会に出る」なんて言ったら、若いやつらみんなに一笑に付されますよ。「あんたほど上達しない人は珍しい」と言われてる口なので、「あんたがどこの大会に出るの?」とか言われかねない事情ですので、ちょっと絶句してしまっただけですけど。ま、それはともかく、大人というのは、皆が皆じゃないですよ、一般的にいうとですが、達成化傾向のようなものが必ずあると思う。何かやり始めたら、何かを達成したくなるんです。「ここを狙っているんだけど、今ここまでなんですよ」みたいなね。これは我々大人みんなにごく普通にある傾向でしょうね。でも、これがいろいろなところで子どもの遊びの見方に現れてくるかなという1つの典型は、私も自分でやってしまっただけで後悔したことですけど、ここに「泥団子の光度表、後悔しています」と私のレジュメに書いていますが(笑)。自分がやってしまったことなので、人のことを言うのはあれなんですけど…

例えば学童保育所とか児童館のようなところで、けん玉とか、あるいは独楽とか、そういうものの取り組みがよく熱心にされているところがありますね。別にそれは、あれはあれで僕は面白いと思う。けん玉はよくできないけど、僕も独楽は好きですから。でも、たいていのところでこの頃は段階表を作って壁に貼ってある。初級どころか、もう10級ぐらいから、9級、8級、◇……◇、初段、2段、3段、4段、5段、6段とか、最後は名人みたいになって、こうなっているわけですね。それで、個々の子どものシールが張ってあって「〇〇君は今2段までいきました」とかなっているわけです。

あれを見て、僕はそういうのが分からなくてもない、気持ちは分かる。でも自分が子どものときのことを思い出して、そんな、あれに段を付けたりしたかなと思うと、ちょっと、どう考えていいのか分からな

いような微妙な気持ちになったりするわけなんです。

私も「光る泥団子」というのに入れ込んでいました。最初のころはあんなもの、人が関心を持つとは思わなかったので、ほんの冗談で「光度表」ってのを作って、ある出版社が乗ったものだから、5,000 枚ぐらい作って世の中にばらまいてしまっています。光度表には、私が作った中で最高のものから最低のものまでの写真が並んでいて、光度 5、光度 4、光度 3 とかとなっているんです。ネットでもホームページにも出しちゃったりしたのだから、関西の方では時々、そういうのが好きな人に会って、「私はずっと修業したんですけど、まだ光度 2 なんですよ」と言われて、表を作った僕の方は「光度 2 って何だったかな？」と、もう分からなくなったんですけど。そんなふうになってしまいました。うーん、あれは冗談でやってしまったけど、ちょっとまずかったなと思ったり。やっぱりこういう何か、達成化傾向のようなものが大人には業みたいにあるんですよね。

それとちょっと似ているかなと思うんですけど、私の知り合いの、大阪の札内さんという学童保育の指導員の人から聞いた話ですけど…光度表とはタイプが違う話ですけどね。そこの学童保育所の子どもたち、3 年生ぐらいの子たちが、ドッジボールで盛り上がってきて、練習して、学童保育所対抗の地区大会みたいなものの予選みたいなものに出て、それで何回か勝っちゃったのね。それで、いよいよ地区大会の本戦に出るということになって、それで指導員の札内さんは乗っちゃったわけです。「これはいくぜ、今年は」みたいな感じで。それで「地区大会で優勝を！」みたいに思った。これでいこうと思っていいたら、その中心人物だった子どもたちが学童に来なくなってしまったんですよ。それで「何であいつらは来なくなったの？」と他の子達に聞いていたら、「どうも最近あいつらは学童に来ずに、どこそこの何とか公園で基地ごっこか何かをやっているらしい」といううわさが伝わってきました。それで札内さんはその公園に出掛けて行って、その子たちを見つけて「何でお前たち学童に来ないの？」と尋ねたら、子どもたち「だって学童行ったらドッジせんならんやろ？」(笑)。行ったらドッジボールをしなくちゃいけない、だから嫌だという話で、彼がずっとこ

けたという話です。

大人は、子どもが何かやりだすと突き詰めて行って、行けるところまで行かせたくなるんですよね。でも、遊びには流動性というものがあるんですよ。でも、大人はこれが理解しにくくなる面を持っているのかもしれない。そうすると、どこかで子どもとすれ違いやすくなる。そういう面があるのかなとちょっと考えさせられたわけです。これが大人の達成化傾向と遊びの流動性の話です。

その二、獲得化傾向

もう 1 つ、獲得化傾向というのが 2 番目です。これも我々大人では、ごく普通のことです。夜中にしんしんとジョギングする人は、それはやっぱり自らの健康のことを考え、いろいろなことを考えて、「体を鍛えなくちゃいけない、そろそろ血圧も高いし」って、僕も言われている。お医者さんにいつも行くたびに、ここ（お腹の脂肪）をぎゅっと握られて、「ここを減らせ、ここ」と言われている。「これを 3 センチぐらい落としたり、血圧が、下が 90 から 80 ぐらいまで下がるから」と言われているんです。大人はそういうことを考えて、遊ぶことで何か得ようとするのが、大人の普通感覚ですね。この遊びを通じてあの人たちと親しくなろうとか、身体を鍛えようとか尾ひれを付けようとするわけです。

そういう面があるわけだから、最近、幼児教育なんかの世界でも、遊びが、PISA の調査の影響ですね、もう学びの 1 色になってしまっていて。僕なんかは、子どもの遊びが専門ですと言うと、教育委員会なんかから講演の依頼が来る場合、必ず「遊びの中における学びについて話してください」と、こういう感じです。僕はもちろん学びが嫌というわけじゃないんだけど、この頃の依頼内容は 1 色です。完璧、もう完全に 1 色になってきています。こうなると、遊びの中における学びについてと依頼されて「考えていません」と言うわけにもいかないから、考えているふりぐらいしなくちゃいけないでしょう。大変なことです。

こうなりますと、何が起きるかという、そういうふうに関心する方も、子どもの遊びを、この遊びを通

じてあれを学びます、例えばドッジボールをする動機が、人数を数えさせて算数の勉強をするためにドッジボールをする、なんて考えているわけじゃないから、そういうことを狙っているわけじゃないんですけど、結果的にそういうことが学べればいいんじゃないかなとなっていくのは、普通感覚ですよ。これをどんどん進めていっていったら何が起こってくるかというと、遊びというものを考えるときに、何か立派そうな遊びだけがクローズアップされてくるわけです。立派そうというのは、本当に立派かどうかはともかく、大人の目から見て、いかにも何か大事なことを学んでいそうに見えるような遊び、そういうものだけが重視されていきかねない危険性を招いてくるわけです。子どもの遊びというのは、大人から見ると何の意味があるのか分からないというのが、おそらく大半を占めているというのが実際だと思うんですけど、これがどうでもいいことをしているみたいに、まあ、どうでもいいことなんでしょう、そういうふうな見方になりやすくなるということです。だから例えば保育所や幼稚園の先生たちが、子どもの遊びについて実践報告なんかをするときも、どうしてもやっぱり、何かそういう立派そうなものだけを選んで発表するようになる傾向というのは、当然出てくると思うんです。

ちなみにどうでもいい話かもしれませんが、私は子どものときに馬鹿なことをいろいろしていたと思うんです。僕は高知県のすごい田舎で生まれたんですけど、あるとき、小学校1年生か2年生のころに、河原に行って石を拾って、これをトンカチでかち割ったら中が純金になっている石があるといううわさがありましてね(笑)。誰が広めたうわさだかよく分からんけれども、それで僕と友達2人ぐらい、3人ぐらいでその気になっちゃって、学校からの帰り道、いつもトンカチを持って、毎日のように石をかち割っては、「これも違う、これも違う」とか言って、総計何百個かち割ったかもしれないというのを、やっていたんですよ。

同じ学校区に山地という名の村があって、その何とかという名前のやつが、ついにそういう石を発見したらしいといううわさが伝わってきて、「あいつが見つけたのか!」みたいな感じで、それですごくまた乗りに乗ってかち割り始めて、本当にどれほど

かち割ったか知らない、なんてことをしていたことがあるんです。それで何を学んだかって、石の中に純金はありませんということを学ぶためにやっていた、みたいなことになるんでしょうか? そんなアホな、そんなことはないだろうと思うんですけど。そのたぐいの、思い出してみたら、訳分からん、本人にしか意味が分からないような、そういうものが子どもの遊びの大半なんですけど、そういうのに対して、「あれは何の意味があってやっているの?」みたいなことになりかねないようなことになるわけですね、この獲得化傾向というのが進んでくると。学校教育的な発想でしか子どもを見られない学び論、の弊害ですね。

その三、上品化傾向

そういうことがあるんですけど、もう1つ、実は今日お話ししたいことの中の一番中心は、3番目の上品化傾向ということです。これはひそかに現代の子どもたちの遊びの中に浸透していつているんじゃないかと思い、僕は実は一番気にしているんです。というのは、1番目、2番目の達成化傾向や獲得化傾向みたいなものは、理屈の上では誰だって問題に思っているから、僕がこんなことを言ってもヘンには思われない。だいたいの人がそう思っているわけですから。でもこの上品化傾向の方は、意外と見過ごされやすい面があるんじゃないかと思っています。これを、私が考え始めるきっかけになったのは、今からもう20年以上前に、ある保育園の先生たちと、子どもの遊びについての研究会をやっていたときに、そのときに当時50歳ぐらいだった、今その方はもう定年で辞めちゃったけれども、もしご健在だったら、おそらく70歳か80歳ぐらいになられている方なんですけど、その人がしみじみと「私なんかはもう年を取っちゃったから、感覚がずれているのかもしれないけど…」と断りながら、「最近の子どもの遊びって何かきれいになっていない?」とか言ったことがあって。それが僕の頭の中に、すっと落ちるほどには分からなかったんですけど、何かちくちく引っ掛かって、研究的トラウマみたいに、ずっと残っているんです。

「遊びがきれいになっている」と。これは何だろうなと思うと、それからずっといろいろ考えるきっかけになっていったわけですが、この特徴というのは、きれいということの意味を僕なりにいろいろ、この二十何年の間に考えさせられて考え付いた1つは、間接化ということです。間接化というのは、子どもなり遊ぶ人が遊ぶ素材とかかわるときに、間接的に関わる傾向のことです。

III 間接化ということ

それは、土や泥に触ったりする傾向が少なくなっているような面もあるんだけど、肉体接触、子どもの遊びがいつの間にかボールとか、椅子とか、媒介物を介して関わるような遊びが自然に増えていっていることに関係しています。ちょっと前の子どもたちはもう少し肉体接触する遊びを、かなり多くのウエイトでやっていたはずなんです。相手の体にかがっとしがみつくとか、直接手足をつかんで引っ張るとか、そういう直接肉体をぶつけ合ってやる遊びというものが少しずつ減ってきています。だから間接的にかかわる、せいぜいじゃんけんになっているという、そういう傾向があるということです。あとは土とか泥とか虫とか、そんな話をしたら切りがないからやめますけどね。

虫に触れる、触れないとかというのはもう、虫について学んだからできるというものではすでになく、直接自分の体に触れられるか否かというのは、ほとんど感覚の問題ですからね。別に僕は子どもが、みんながみんな、虫をひつつかまえて捕らなくちゃいけないと思っているわけではないんですよ。でも、たいたいの大人はこういうのに間接化しているんですよ。大人でも虫の収集が好きな人は時々いるけど、そういう人はだいたいピンセットで触って、きれいなガラスケースか何かに入れて、「僕の収藏品見る？」みたいな感じで、人に見せたりして喜んでる感じだよ。子どもみたいに、ほら、カマキリかなんかを手にして午前中からずっと握っていて、こうやって「開いてごらん」と子どもに手を開かせたら、中で虫がぐちゃぐちゃになっているとか、そういうことは大人は普通しないでしょう。子どもの場合はこうやって、かわいがっているつもりが、いつしかぐちゃぐちゃにされて、元は1匹だったか2匹

だったのかも分からないような姿にされるというのは、子どもの虫とのかかわり方の典型を表すわけで。そういう意味でいうと、普通の大人感覚で接するとこういう遊びの間接化傾向というのが生じるのが一つの必然なんですよ。

III 保守化ということ

次、時間もあれですから、もう少しで終わらせませんが、次の保守化というやつは、これは単純に言ってしまうと、遊び方とか、遊びの文化だとか、遊びの中でつくったものとか、そういったものについての固定化傾向のことをいうんです。

だから、例えばよく大人で、子どもたちの遊びに、「近ごろの子どもは遊びが分かってない」とか言う人ね。よく聞いてみたら、「自分らはこの遊び、昔はこういう遊び方をしていなかった、それなのに今の子どもたちは何だ、あの遊び方は？」みたいな。つまり、その人の頭の中で、この遊びはこうやって遊ぶものだという、何かイメージがあるのね。それに沿ってやっていなかったら、何か遊んでないみたいと思う傾向というのが結構あるわけなんです。やっぱりそれなりに昔よく遊んだ人に限って、そういうふうに思いやすい面もあったりするんですけど、そういう保守化傾向というんですかね。

遊び方に対しての保守化傾向もあるけれども、それに輪を加えてあるかなと思うのは、先日東京のりんごの木とかという幼稚園の園長をされている、柴田さんという方がおられて、この人と広島でたまたま、こんなことをさせられることになっていたときに、その人がしゃべった話で面白かったものがあります。

この柴田さんは絵本作家でもあって、絵本なんかも出されていらっしゃるんだけど、この人が「最近の子ども、自分の幼稚園の子どもを見ていると、泥棒の仕方も教えなくちゃいけなくなっちゃった」と言っているんです。何かというと、昔の子どもだったら、子どもを連れて公園なんかに行って、そこに柿の木か何かがあって柿がなっていたら、「あれを取ろう！」ということになって、気が付いたら登っていて、よその柿をゴッそり取って帰ってきていて、そこら辺のおばさんに怒られて帰ってきた、みたいなことがあったんだけど、最近の子どもはそう

いうことをしない。で、教師の方が仕掛けていって「あれを取ろうか？」と言ったら、「だめなんだよ、先生、あれを取っちゃ」とか言う。公園のここに立って看みたいなのがあるじゃない。そこにこうやって、カキの木を取ってはいけませんとか書いてあるじゃない。「先生、ダメって書いてあるもん」とか得意げにいう。今の子どもたちはすぐそういうのに従ってしまう。ましてや先生がそんなものを取ろうものならえらいことになるような、そういう傾向が異常に強まっている。「いまやもう、私らが率先して柿泥棒の仕方を教えてあげなくちゃいけなくなっちゃった」(笑い)と言っているんだけど。そういうような意味で、遊び方についての保守的な傾向というのが、やっぱり強まってきている傾向があると思います。それはやっぱり大人自身が、この遊びはこうやって遊ぶんだみたいに、固まった大人の常識論がいろいろな形で影響を与えている部分が出てきているのかなとは思ったりするんですけど。全然泥棒とは関係ないんですけど、遊びの文化ということで、最近出会って面白かったというか、複雑な気持ちになったことがあります。これはある保育園の先生に聞いたんですけど、その保育園に高校生の女の子が保育のアルバイトに来ていて、その子が2歳児相手に『三びきのやぎのがらがらどん』という絵本を読んでいました。この絵本、幼児関係の人たちはみんな知っていると思う。最初小さいヤギがやって来て、橋の所に来たら恐い鬼のトロルが出てきて、「誰だ、俺の橋をガタゴトさせるやつは？」みたいに言われて、それで小さいヤギが、「後からもっと大きいヤギが来るから許して下さい」みたいな話をして無事に橋を越えていくんですね。そこを読んだ高校生の女の子が「こいつら、仲間を売ったんやで」と言ったんだそうです(笑)。それを職員が見ていて、後で、職員会議で大問題になって、結局その子はクビになったそうです(笑)。それを聞いて、何と言ったらいいのか、何ともすごいなと思って、どう考えていいのかいまだによく分からないんですけども、それでクビにするかな？とかと思ったけれども。

遊びの文化、素材について、大人には、それをそのまま美しく残していきたい気持ちというのがありますから、それを破壊することも可とするという遊びの世界の論理とぶつかる場合が出てきます。これ

が起きると、周りにいる大人の価値観を揺さぶってしまいます。こんなことを言いたしたら切りなく、いろいろある。そのようなことが、この保守化ということに関係する話なんです。

III 否定的感情経験の回避

もう1つ最後、否定的な感情経験の回避ということですが、これは近ごろの保育園、幼稚園の保護者の方には結構強い傾向として生まれていると思います。僕の知り合いの保育園といっても、僕には、行きたくなる園と、あんまり行きたくない園というのがあるんですが。僕が行くといつまでも加用先生、加用先生と、僕をいつも先生付けでしか呼ばないようなところにはできるだけ行かないようにしています。2〜3回行ったら、そのうち「加用さん」になったり、「おっちゃん」になったりするところには、まあ、行こうかな、みたいになったりするわけですけども。それともう1つの分かれ道は、節分のような取り組みのときに、怖い鬼が出てきて、子どもを泣かせて喜んでいるようなところは、僕はだいたい好きなわけね(笑)。そういうところに行くと、何となくほっとするわけです。でも近ごろ保護者の中には、節分の日が近づいてくると、「明日はうちの子はお休みさせていただきます。うちの子が嫌だと言っておりますので。」とか何か言って、そういう保護者が結構多くなってきているんです。子どもに怖い思いとか、つらい思いとか、悲しい思いとかさせたくない。そういう経験が関与しそうな遊びになってくると、「もうやめておこう」みたいな。そのところでやっぱり子どもについての感覚のずれみたいなものが生じてきています。

僕は遊びというのは基本的に、やってみないと分からないようなところがあるものだと思っています。だから僕なんか、例えばゴルフなんかしないじゃないですか、やったことないです。だから僕は正直言ってみると、あんなものやって何が面白いの、とか思ったりするわけ。「でもビリヤードをやっているじゃん？」と言われたら、何とも答えようがないものがあるんだけど。つまり、やったことの無い遊びというのは分からないところがあるのね。それで、何だ、あんなしょうもないと思っているけど、何だか変な羽目に陥って、やらざるを得ない羽目に

なって、やってみたら「すごー面白いじゃん、これ」みたいな、そういうことになったりもするわけです。あるいは反対に、ちょろい遊びだと思って加わってみたら、実際はそんなことなく、えらくつらい目に遭うことになってしまったということだってあるわけですね。勝ち負けのある遊びみたいなものは、時々そういうことが起きる。軽い気持ちで参加してみたところが、「お前のせいで負けたんやで」とか言われて、えらい目に遭うことだってあるわけで。あるいは、怖い遊びでも、節分の鬼に追われてすごく怖くて、「もう嫌だ、本当に行きたくない」という子が、何かの羽目で行ってみて、鬼に追い掛けられてみたら、えらくそういうことが病みつきになってしまうことだってあるわけです。泣きながら、また行きたくなくなったりして。

遊びに、やってみなくちゃ分からないというところがあるおかげで、おかげというか、せいだと思うんだけど、そのおかげで、加わってみたら思わぬ目に遭うということが出てくるわけです。当然やっぱりその中で否定的な感情経験をする羽目に陥るわけですね。それがまた子どもの成長にとっては非常に重要な意味を持つわけですが、今だんだん、あらかじめ大人の方が考えて、ひどい目に遭いそうな感じがすると、せき止めておくというのが、傾向として強まってきているんじゃないかな、みたいに思ったりしているわけです。こんな風に考えてみると、上品化傾向というのがいわば極限まできているのが、いわゆるテレビゲームみたいなものでしょう。だから、今僕は子どもの遊びが、一線を越えて上品になってきれいになってきているというか、そういうことに自覚的にならなくちゃいけないようになってきているんじゃないかなと思い、大人が自分の遊びの常識で考えていると、そうなりやすい、そういう面に気をつけましようということです。おしまいになります。そんなようなところで、すみません。(拍手)

質疑応答部分

(質問 1) 自己肯定感と遊びの関係についてお聞かせいただけますか？

(加用) いや、質問 1 さんが言われている関係する

話は、僕はひきこもりとかそういうことについて、そんなに関わっているわけじゃないから分からないですけれども、関連しているかもしれないなということで、小さい子どものことについて気になっているのは、僕の感覚ではやっぱり、今の小さい子どもたちが自意識が強過ぎるということです。関係しますが、僕は自己肯定感というのを幼児など小さい子どもに関して使うのはあんまり好きじゃないんですよ、その言葉を使うことに違和感があります。というより、今の子どもたちは、自意識が強過ぎる、人間関係についての意識がちょっと過剰過ぎる感じがしています。

保護者の方も、最近では、子どもが帰ってきたときに、「今日誰と遊んだ？」とか、「誰とどんなことをした？」とかというのを、やたら聞くようになっていきますね。2 歳ぐらいで、もうだいたい答えられるので、もう、そういうことを聞くわけです。子どもは始終それを意識する。結局、「今日は誰と遊んだ」、「誰とは遊べなかった」、「誰は好きだけど誰は嫌い」とかいうことを、小さいときからずっと気にする生活を、いつの間にかずっとするようになっていっていると思う。

考えてみたら私たちの子どものときとか、私の子どもの場合もそうかもしれないけど、あんまりそんなことを聞いたりしなかったですよ。だんだん最近はそのようなことを聞くようになってきているので、子どもたちが小さいときから、周りにいる人についてどう思っているかというのを、すごく考えてずっと過ごすようになってきています。

それで、やっぱりそれが幼児期、小学校、中学校、高校へ行って、そういう「過剰な自意識」や「過剰な人間関係意識」を、タレントみたいにうまく利用して生きていける子たちもいるけれども、これが本人を苦しめていく面も当然出てくるので、僕は考え直さなくちゃいけないんじゃないかなと思い始めています。

最近では、京都の中学校の養護の先生の、特別支援学校の養護じゃなくて、養護の先生ね、養護教諭だとか、そういう方の実践報告を何回か聞くことになって、考えさせられることですが、中学生が、朝から「今日はお昼ご飯を誰と食べるか」ということが気になってしょうがないという子がすごく増え

ているという。それで、お昼ご飯の時間が近づいてくると、すぐ養護の部屋にやって来て、何ていうこともないのに来ているから、聞いているとやっぱり、「1人になるんじゃないか?」とか、あるいは「一緒に食べたくもない人と食べなくちゃいけない羽目に陥るんじゃないか?」ということをととても気にしているということを知ったりして、僕は、子どもたちは何かそういうことを「過剰に気にするような生き方」を強いられている感じが、とてもして、それがとても気になっているんです。

それはおそらく今の、僕なんかは学生たちを相手にしているわけだけど、学生たちにもやっぱりそういう傾向がかなり強くあるね。だから食堂や何かで例えば1人で食べたりすると、「あの人は1人で食べていた」とかと言われるわけね。何でお昼ご飯を1人で食べたら悪いのか分からないけれども、そういうことを妙にすごく気にする傾向があって、当然そういう人が親になり、あるいは教師や保育者になる。それはとうていやっぱり、以前とは比べものにならないくらい、子どもたちの人間関係にすごく気を使う。そういうことが累進課税じゃないけど、こんなに大きくなっていつている感じがしています。

だから今の子どもたちは大変だなと思うんです。いつも近くにいる人との人間関係を気にしていなくちゃいけないというのは。そんなことは昔のおじさん、おばさんはろくに気にしていなかったんだけど、そんなふうになっちゃったなというのを1つ感じています。

別の話題ですが、宮浦さんの話を聞いていて、僕が普段かかわっている子どもたちよりもわりあい年齢の高い子どもたち、主に、さっきビデオに出ていたのは5～6年生とか、中学生かもしれないけど、大きい子どもたちを対象にされているので、それで、私なんか普段知らないような世界なんだろうなと思いつながら、ちょっと考えさせられたことがありました。話がころっと変わりますけど。

私は昔、近所の、ずっと昔ですけど、6年生ぐらいの子たちを対象に、「忍者がいる」とだましたことがあるんですよ。幼児と違って、小学校6年生ぐらいの子たちをだますとなると、大変なことをしなくちゃいけません。幼児だったら、好き者のお父さん

に忍者の格好か何かさせて、園内を走らせればそれで済むけれども、小学生はそうはいかないから、ちょっと公には口にできないような手も使わなくちゃいけないようなことになるでしょう。それで半年ぐらい大騒ぎしたんです。その後、僕は、何か胸にちくっと痛むものがありました。何が胸にちくっと痛んだかという、そんなことをしたことを反省したのでは全然なくて、自分の子どもにやってあげられなかったなというのが、すごく心残りだったんです。

うちの息子が6年生のときに、「もうそろそろ限界だな」みたいなときに、たまたまうちにいた学生、男子学生4人ぐらいが、「先生、そういうのを俺たちもやりたい!」とか言いだして。僕はもう年を取ってきたから、もう面倒くさいから「嫌だよ、あれをやると半年は捨てることになるぞ」と言ったけど、「僕らが全部やる!」と言うから、やったんですよ。今度は忍者じゃなくて、ちょっとハイテク使ったものにしようということで。どういうふうに行ったか、ちょっとだけ話します。

うちの息子たちが6人ぐらい、いつも仲良しがいて、彼らが学校から帰ってくるときに、学校の帰り道で、ある男が、わざわざそいつは2～3カ月かけてひげをもじゃもじゃにさせたんだけど、そいつがよろよろと駆け寄って、子どもの1人に封筒を渡すんですよ。そこへフォルクスワーゲンがブインとやって来て、中から黒ずくめの男2人がぱっと出てきて、さっきのよろよろ歩いていたやつを無理やり車の中に押し込んで去っていくという(笑)。

それでその子どもがもらった封筒は、中を開けてみたら、中にフロッピーディスクが入っていて、フロッピーをWindowsのパソコンに入れると、自動的に立ち上がって、ある風景写真が写っていて、そのところの下の方に、ちょっと草みたいなところでブヨブヨとなっていて、いかにも「クリックしろ!」と言わんばかりに。ピッとクリックすると、ぱっと画面が変わって、漫画のルパン三世の絵がぱっと出てくる。それでまた、こっちの方でびよびよとなっていて、そこをピッとクリックすると、またぱっと消えて元の画面に戻って、さっきのブヨブヨのところに矢印が付いていて、「ここをほれ!」と書いてあるんですよ。

実は、子どもが写真を見ると、どこの場所か分かるようになっていく。地域の子たちだからね。それでそこを掘ると、実は中に箱が入っていて、出すと箱の中にポケベルが入っている。ポケベルを通じて、それ以降、子どもたちにいろいろな通信文が来るんです。「ひげが消えた」とか、「仏像が…」みたいな、訳分らないことが出てきて、いつもそれが来るたびに、発信人の名前は不二子と出てくる（笑）。

これも終わるまでに半年ぐらい、終わるといふか、一応收拾をつけるのに半年ぐらいかかったんですけど。これね、面白がって皆さん笑ってくれるけど、まじめな顔をした誰かに、「そんなことをやって何になるんですか？」と言われたら、そこまで言われなくても、「あなたは何のためにそんなことをしたの？」と言われて、僕は絶句して答えられないわけです。「やってみたかったんだよ」とか言うしかない。

それで今日宮浦さんの話を聞きながら、「ああ、そうだったのか！」と思ったのは、いやこれは勝手な誤解かもしれませんが、高学年の子どもたちを対象にしてアートの芸術家の方たちとかかわって、ああいうことをやるということについてですが、僕が何を思ったかという、6年生ぐらいの子どもたちに、「大人の世界というのは、あんたらが思っているよりずっと奥が深くて面白い、謎に満ちた世界というのがあるんだよ」というのを伝えたかったという気持ちがあったんじゃないかなと僕は思ったのです。

だから、6年生だから、ほら、なんかのくそまじめな話題を持ってきて、地球環境がどうのこうのといったって、どこか絵空事っぽいでしょう。それをもうちょっと彼らの感性に合うような形で「何か大人って自分らの世界を超えたところで、変な大人たちもいて、何かこう、面白そうな世界がこの世にはあるらしい」というのを、衝撃的な形で伝えたかった、みたいな気持ちがあったんじゃないかなと思っています。

今このアートの取り組みの話をお聞きして、考えてみると、小学校の高学年や中学生ぐらいの子どもたちの遊びの文化というのは今、小さい子よりもっとずっと貧困になっているんじゃないかと思うんです。今は、商業的な形で来る遊び文化以外のもの

のを、彼らが自力で見つけるのは、ものすごく難しい時代になってきている。そういう中で、やっぱりこういうこの「変な大人」の1人の、1人じゃないかもしれないけど、アートの方が関わりながら、何か子どもたちが大人の世界について持つイメージを変えるきっかけ、そういうものを与えているんだなと思い、そう思ってきたら、僕もルパン三世も、あれはあれでよかったか、とかと思ったりして、ちょっとそういうふうを考えさせられて、気付いちゃった。これから今度聞かれたら、こうやって答えようと思いました（笑）。ありがとうございました。

（質問2） 今、子どもたちが集団で遊べなくなってきた一番大きな原因は何なのでしょう。

（加用） すみません、あんまりそういう難しい、それは本当に今はもう、児童館や学童保育所のようなところで働いておられる方のすごく大きな悩みですよ。いろいろな要因が絡んでいると思うので、単純に言えないというか、集団遊びはだいたいルールのある遊びのようなものである、一番典型的に出てくるんですけど、やっぱり非常に負けることをすごく気にする子たちが増えていとか、そういうようなこともあるし、異年齢の集団がどうのこうのという話もいわれていますけど、私もその程度のことしか本当によく分からないんです。

もう1つ別の面もあるかなと思う。これはあんまり言わん方がいかなとは思いますが、僕なんかは子どものとき、僕が生まれたところはものすごく田舎だったから、学級規模は小さかったんですけど、中学校のときなんかは1クラスに60人もいたんですよ。クラス。もう前の方は見えないような感じで。だから、何かすごくそういう意味では、組織立ち方が違うなど。だから、別に多い方がいいだとか、そんなことを言っているわけじゃないんですよ。だから、昔は大集団で遊ばざるを得なかったのかもしれないという気もちょっとあったりして。

だから、極端になっちゃっている感じがちょっと。今はだからほとんど3〜4人でしか遊べないみたいな、10人にもならないみたいな、そういう感じになってきていて、もう本当にこの件は私、ギブアップ、どう答えていいかよく、本当に分かりません。すごく学童や児童館の職員の方の共通の悩みになっ

ていて、なっているだけじゃなくて、どう考えていかにもよく分からないような感じになっている気がします。すみません、答えられません。許してください。

(質問3) 田舎と都会の両方の子育てを経験し、「つまらない時間」を何とか解消しようというのが遊びにつながるのかなと感じました。

(加用) 1つだけ。今のお話を聞きながら、先ほどの質問の方との関係でちょっと思ったんですけど、言っているか分かりませんが、やっぱり今は学校が子どもを支配し過ぎていますよね。だから、帰る時間だっけずいぶん遅くなって。子どもの日常生活の中で学校の占める割合というのが、ある限度を超えて肥大化してしまっている感じがあって。だから学校を離れた場での、子どもたちが勝手にする、勝手につるむ時間そのものがほとんどなくなってきているということが、やっぱり、それだけではないかもしれないけど、非常に大きいというか。それは学校の先生たち自身の苦しみでもありますよね。子どもたちの全生活を、責任を持って見なきゃいけない。

他方、子どもも親も学校に制約されて、ほとんど生きていますから、いわゆる放課後という言い方自身がよくないのかもしれないけど、午後、夕方の時間、そういうもの自身がなくなってきている中で、「集団で遊べ!」といわれても、どだいもとの素地がないという。その辺のことは根本的に考えざるを得なくなっているんじゃないかと、僕は思っています。だから、もう少し学校がやる仕事を厳選していくことをしていかないと、何から何まで学校が全部やるというようなことをやっていたら、無茶じゃないかなと思いますけど。